

日本心理学会第**89**回大会公募シンポジウム

『宗教を信じる(信念・信仰)とはいかなることか
実証的宗教心理学の挑戦**(4)**』

指定討論 河村従彦

2025年9月7日

経歴・職歴

臨床心理士・牧師（プロテスタント）

心理相談室運営 KCPSカワムラカウンセリングルーム

<https://counseling.kcps.jp/>

YouTube講話発信 恵みフォーラムチャンネル

<https://www.youtube.com/c/megumiforum>

牧会・心理職研修 KCPSコンソーシアム（2025年4月開設）

<https://consortium.kcps.jp/>

大学・神学校の非常勤講師、他

テーマを受けて

企画主旨

宗教学において「信じる」がどのように語られてきたかを概観し、この概念の整理を試みる。その上で、調査・実験および臨床現場で得られた知見を基に様々な「信じる」の様相を示していく。

- 1 対象はあるか どのように規定できるか
- 2 人間には「信じる」機能がある
- 3 人間理解の心理臨床的視点を再認識する
- 4 宗教は「信賴・信仰」ではない

I 宗教学において「信じる(信念・信仰)」はどのように語られているか 藤井修平先生(國學院大學)

- 1 心理学 信念は定義されるが信仰は対象外
宗教 信仰は宗教にとって根本的なもの
キリスト教 神に対して人間が取る態度
仏教 信心—仏の教えを信じて疑わないこと
- 2 信念と信仰 信仰には命題を真とする以上の何かがある
神的存在を信賴、帰依

I 宗教学において「信じる(信念・信仰)」はどのように語られているか 藤井修平先生(國學院大學)

3 ビリーフ中心主義からプラクティスに着目する傾向

ビリーフ 観察不能な内的なもの

プラクティス 観察可能な外的なもの

▼臨床的視点

信仰には命題を真とする以上の何かがある

キリスト教「真理」 絶対命題ではなく実存的出会い

Ⅱ 祈りから読み解く「信じる」プロセス：実証研究と体験を通して 袋本久美子先生（関西大学大学院）

1 信頼感の芽生え → 信の強化

信じるとは、宗教の教えや真理の探究への向かう
祈りと共にあるプロセス

2 「協働する他者」として神を意識

その関係性の中で課題に取り組む
→ 人の能力を引き出す可能性

人間の心理的効果をもたらすという知見

Ⅱ 祈りから読み解く「信じる」プロセス：実証研究と体験を通して 袋本久美子先生（関西大学大学院）

▼臨床的視点

祈りの動的側面 → 宗教と思考停止

- ・信仰は考え抜く先にある！（河村）

疑いの内包する決断こそが真の信仰である（テーリツヒ）

- ・健全な信仰は10%の疑いを含む（河村）

Ⅲ 精神科臨床と宗教的契機—定点性をめぐって

小笠原將之先生(関西福祉科学大学)

妄想と「信じる」の違い —どこに定点を置くか

外部に閉ざされているか、外部に開かれているか

信仰と信念の違い

オリゲネスの霊、魂、肉体三元論をモチーフに

信仰 外部「霊の次元」に向かう

信念 内部要素に固着する

Ⅲ 精神科臨床と宗教的契機—定点性をめぐって

小笠原將之先生(関西福祉科学大学)

▼臨床的視点

イデオロギー—原理主義

宗教の問題よりは「信仰」から離れた人が陥りやすい現象

魂の次元に定点性を付与すると精神活動は硬直化する

宗教の思考停止 カルト問題、同時に伝統宗教も

IV 「信念・信仰」から宗教性は捉えられるか 西脇良先生(南山大学)

宗教的自然観

対自然認識と対自己認識が循環していく構造

心理学における宗教性研究は曲がり角

「わからない」という回答 → どう訊けば「わかる」のか

→ 宗教的無関心

IV 「信念・信仰」から宗教性は捉えられるか 西脇良先生(南山大学)

▼臨床的視点

宗教的無関心

信じていない 無宗教である わからないなど →議論の外

宗教的無関心 —必ずしも拒絶ではない

「宗教的な人 — 宗教的無関心 —無宗教の人」

宗教的断絶は共通のボキャブラリーを持たないことが原因

最初に想起されたポイント

- 1 対象はあるか どのように規定できるか
- 2 人間には「信じる」機能がある
- 3 人間理解の心理臨床的視点を再認識する
- 4 宗教は「信頼・信仰」ではない

1 対象はあるか どのように規定できるか

A 聖書起源の絶対他者神論

ユダヤ教典としての聖書と何らかの関係がある宗教性

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教

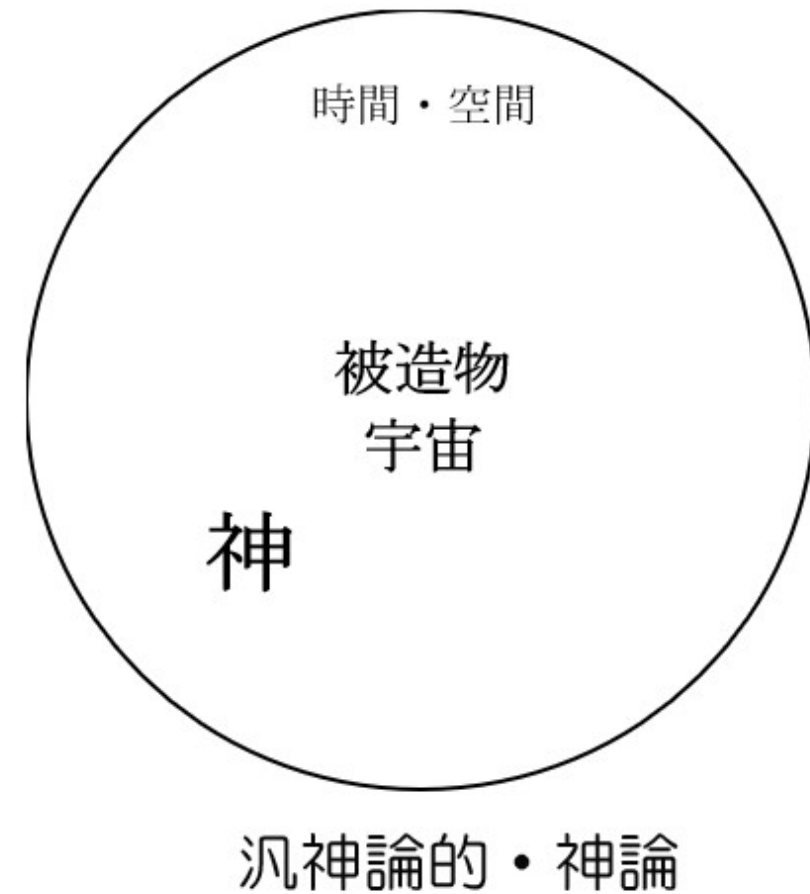
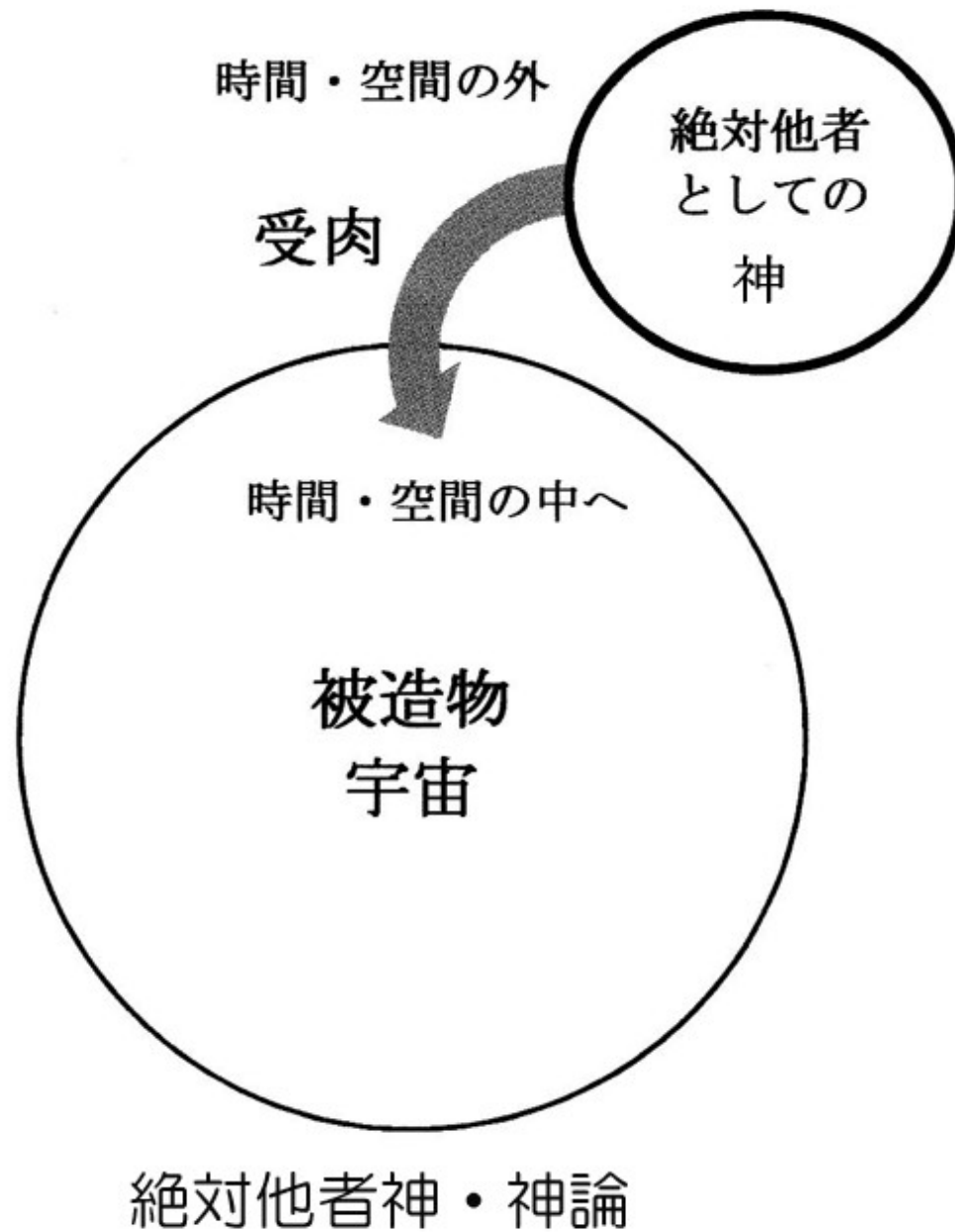
B 汎神論的神論

その他の宗教文化圏

疫学調査のように、横断的に調査が可能か

質的に状況を丁寧に見る視点で調査が可能か

《参考》 2つの神論



2 人間には「信じる」機能がある

1 宗教と科学の関係

知的に知る → 科学の俎上（追試が可能） 科学の疑似宗教化
信じる → 宗教の疑似科学化

2 キリスト教的視点 神のかたち（イマゴデイ） スピリチュアリティ

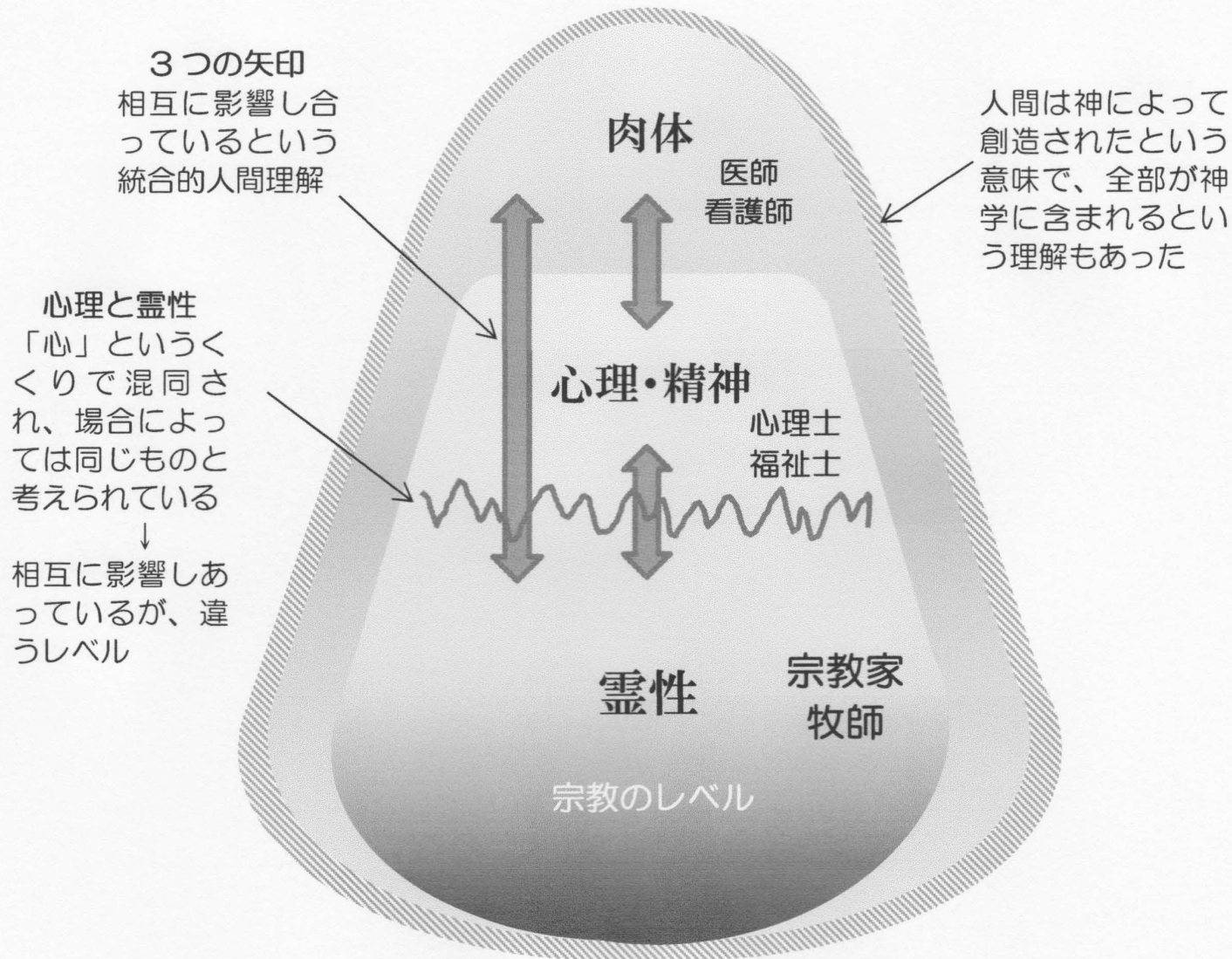
3 発達論的視点 ファウラー Stages of Faith

信じる機能は人間の成長に応じて発達して行く

◆ 提出された共通的知見 信じる機能は動的なもの

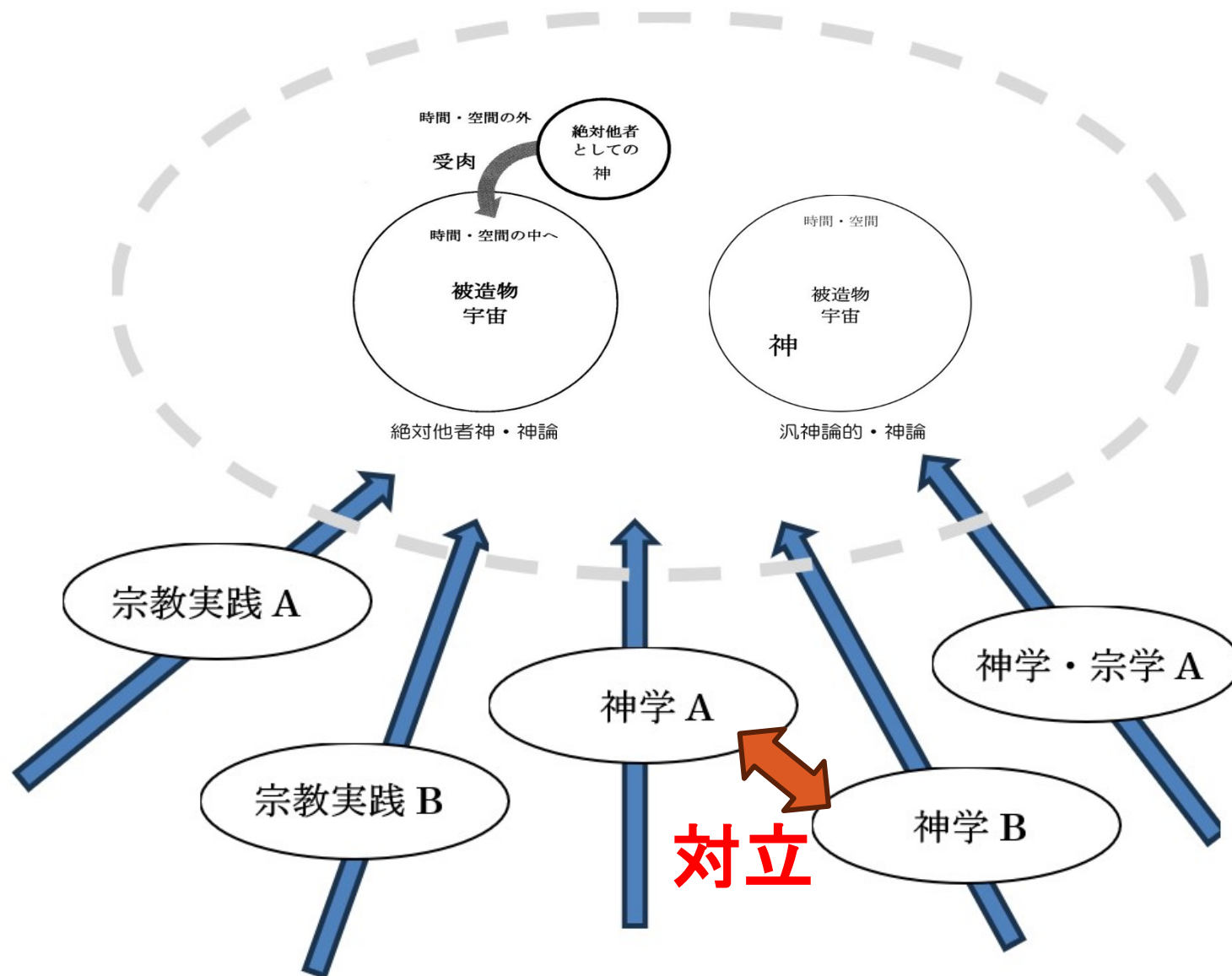
宗教心理学の実証研究は可能性が広がっている！

3 人間理解の心理臨床的視点を再認識する

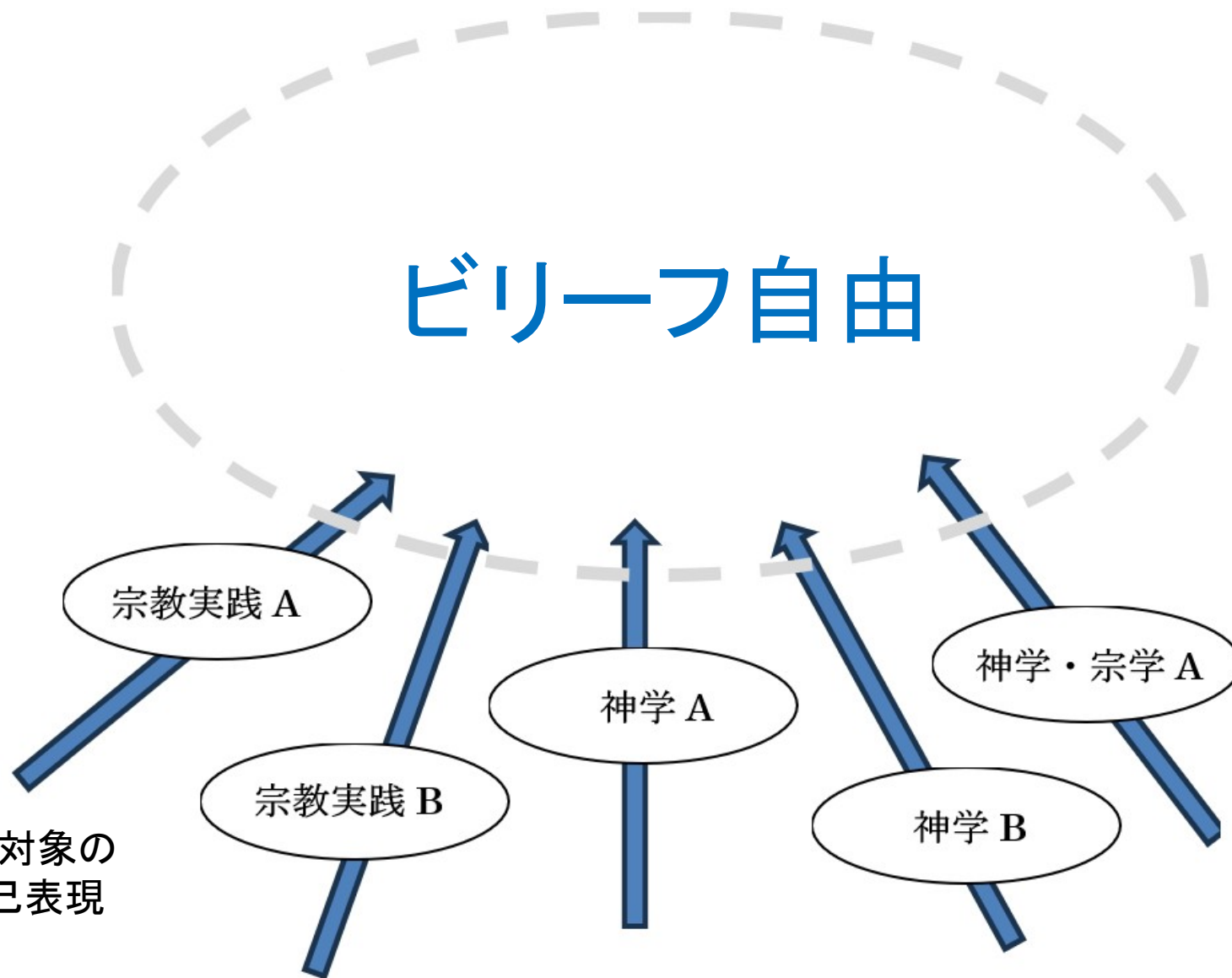


心理学研究の手法に
乗せることが重要
「操作的定義」

4 宗教は「信頼・信仰」ではない



4 宗教は「信頼・信仰」ではない



NOTSモデル、非対象の
全体的共創的自己表現
(小西, 2025)

宗教心理学の実証研究に向けて

1 「ビリーフ自由」、「霊」が、宗教・文化を越えて普遍的なものであると証明・定義できるか

2 実証研究は言語化が避けられず、1を毀損しない言語化、ボキャブラリーは可能か

付 言語化した際、「ビリーフ自由」の実態から離れてしまうことがわかったときには、「生の立場」を尊重し、実証検討を行わないという選択肢もあるか

議論の深化のために 藤井修平先生

Q1 プロテスタントの一部反省として、カトリックから学ぶことで、ビリーフ中心主義を修正する動きがあります。ビリーフ対プラクティスの分析の中で、西洋プロテスタンティズム・スピリチュアリティ対仏教・神道という対比がありますが、1054年にカトリックが正教会から分裂、さらにプロテスタントがカトリックにプロテストした15世紀以前は、ビリーフ中心主義ではなかったという理解でよろしいでしょうか。

Q2 東方正教会スピリチュアリティについて、何かご見解がおありでしたら教えてください。

議論の深化のために 袋本久美子先生

Q1 研究協力者は、祈るという言葉聞いた時点で、何かよりどころにできそうなものを探すものなのか。あるいは、もともと内界の記憶にあったものが想起されてくるのか。さまざまな対象があるということですが、そのあたりのご見解を教えてください。

Q2 協働姓が感じられないとき、「信じる」の世界では、そこに寄り添いの可能性があると考えますが、寄り添って行こうとするとき、こういったことが有効か、ご提案があれば教えてください。

議論の深化のために 小笠原將之先生

Q1 変化変容を経験した方々が、《何か》を異口同音に「神」と表現したとのことであり、提示されたケースでも「神からの赦しをいただいた」という言い方がされていました。先生は、神や宗教については言及しなかったということでしょうか。その他のケースではどうでしょうか。

Q2 ご提示いただいたケースに類似した事例は、どの程度の頻度で観察されるものでしょうか。また、臨床理論としてモデル化が可能とお考えでしょうか。キリスト教では、神学という枠組みでモデル化を試みてきたところがあり、モデル通りでない人に弊害をもたらす現象もありました。

議論の深化のために 西脇良先生

Q1 「宗教的な人 — 宗教的無関心 — 無宗教の人」という分析に関して、日本というコンテクストで、無宗教の人はどのくらいいるのでしょうか。いるとすればどう定義されますか。

Q2 絶対他者神論と汎神論的神論に共通的な言語設定について、何かヒントがあれば教えてください。

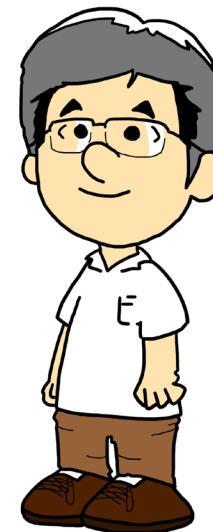
参考文献

Fowler, J.(1981). *Stages of faith: The psychology of human development and the quest for meaning*. New York : HarperOne.

河村従彦(2015). 日本人キリスト者の神表象研究——Wesley理論に基づく教会教育の視点から. 東洋英和女学院大学大学院人間科学専攻博士論文.

小西達也(2025). 大乘の実践を考える——NOTSモデルに基づいたスピリチュアルケアの視点から. 武蔵野大学公開講座.

ご静聴ありがとうございました。



おつかれさま
でした

Kawamura@kcps.jp